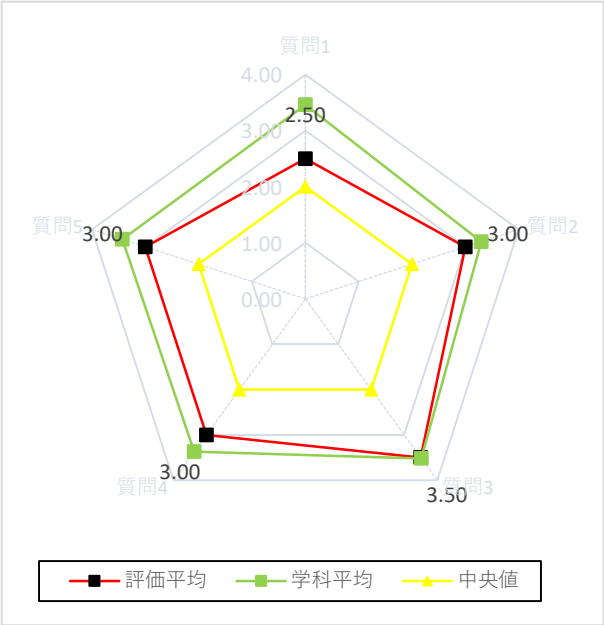
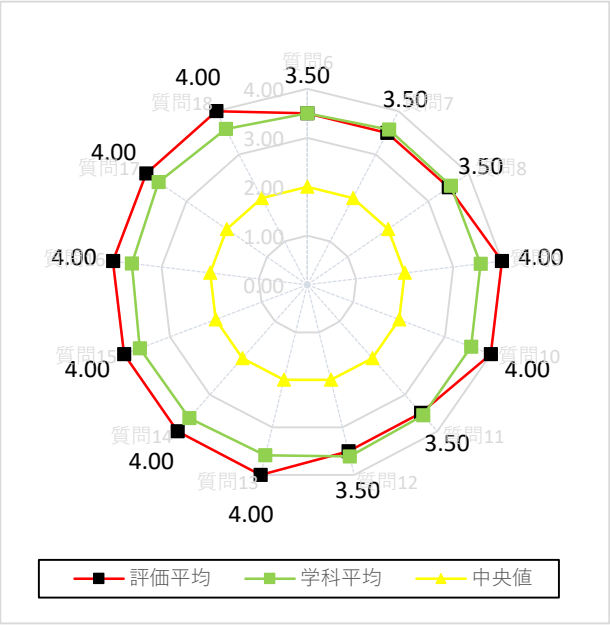
学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう（初年次教育含）	2名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

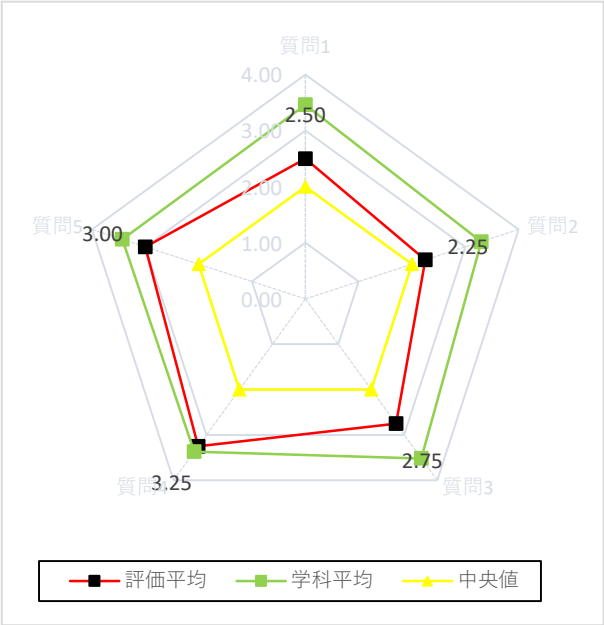
入学後に様々な科目が入り、あすなろうの本学特有の科目だったので、興味深い面もあるが反面、わかり辛さがあったかもしれません。責任者から丁寧な説明があり、理解を深められたのではないかと思います。また、クラスの交流の機会ができた点は良かったと思います。チームメンバー同士が協力しながら、チームワークを少しずつ高めていたと思います。

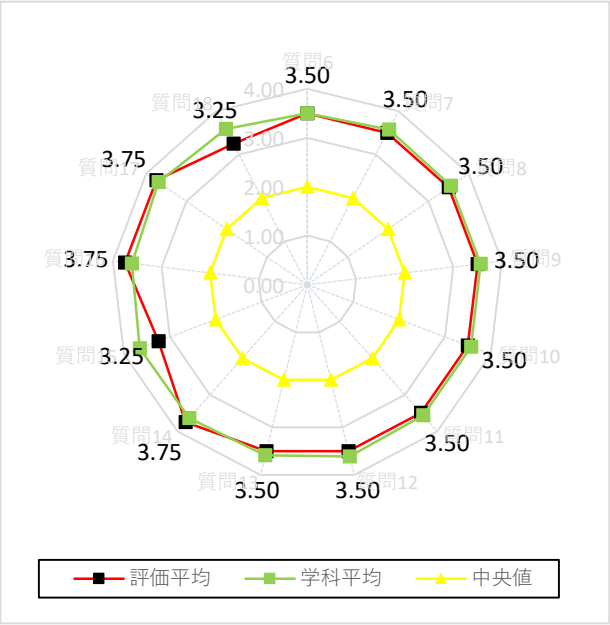
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は新たな取り組みで、さらに全学的な動きになり、3キャンパスの交流になり、もっと広がりのある学修や交流ができると思います。大学の強みを活かし、今後の学修につながればと思います。後期は学科内でのプログラムとなり、看護専門職のキャリア形成の内容も入ってくるので、関心度は高くなると思います。担当教員間の調整も強化し、円滑な運営と学生の主体性も高まるよう、ボランティアの体験をどのように伝え、学びにしていくか、チームワークが上手くできるようサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう（初年次教育含）	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

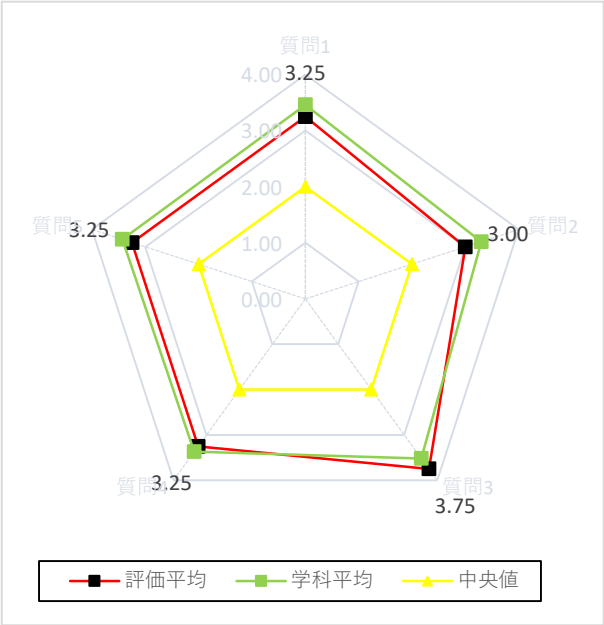
質問18「この授業を総合評価して下さい。」が学科平均より低い。本科目は資格取得に直接関係のない本学独自の科目のため、位置付けや目的が分かりにくい面があった可能性がある。しかし、大学に入学して間もない時期にグループワークなどで学生同士の交流の機会を作ることは重要であったと考える。

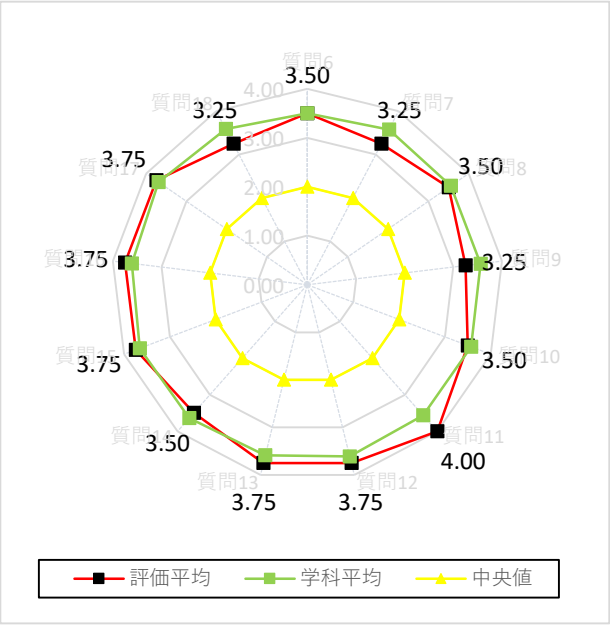
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は全学的な動きとなり、学科横断の交流になるため、さらなる学修や交流ができると考える。担当教員間の調整も強化し、円滑な運営と学生の主体性も高まるようにサポートしていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう（初年次教育含）	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

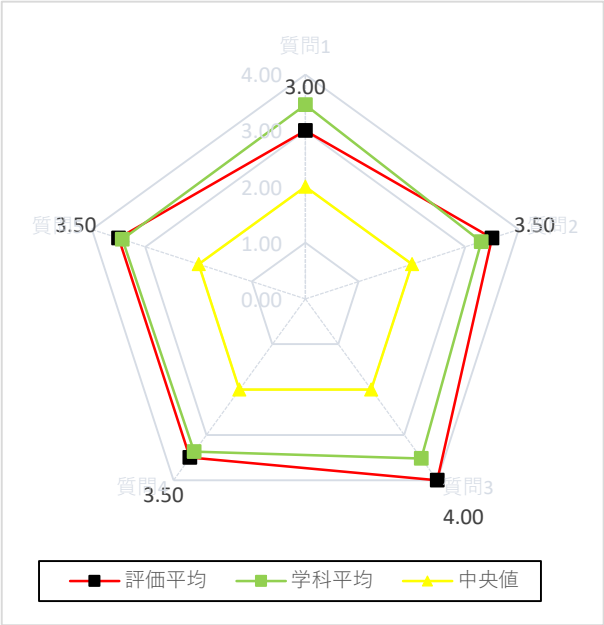
担当学生への体験活動報告会の資料準備のアドバイスに加え、学生全員を対象に「キャリア開発講座」の助産師について講義した。
体験活動報告の準備が学生たちが主体的に協力しながら取り組んでおり、授業への取り組みは平均より高いのに対し、学生自身の自己評価は平均より低い結果となっている。この原因について学生個々に確認していく必要がある。

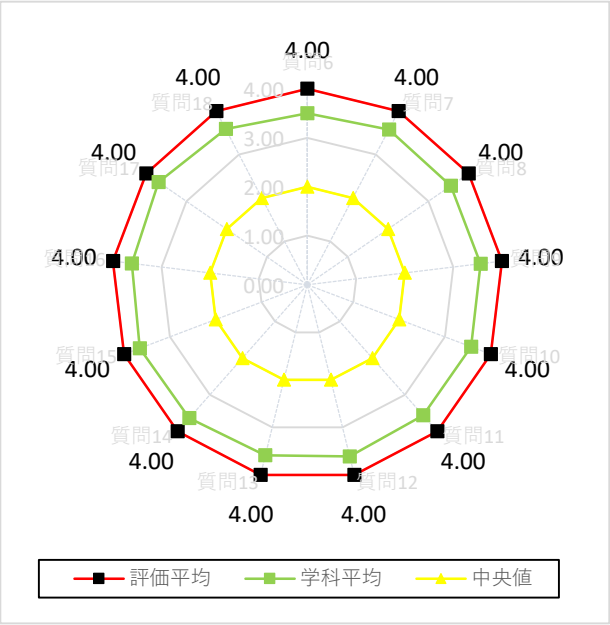
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は学生の自己評価が上がるような関わりを心がける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう（初年次教育含）	3名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

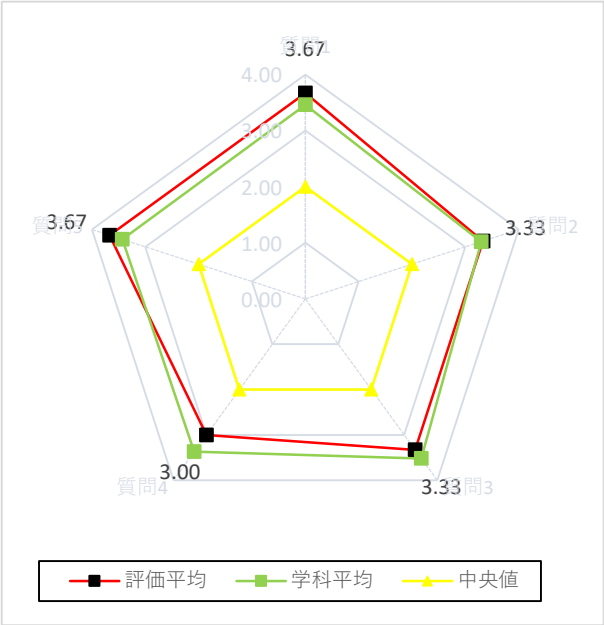
講義、演習、グループワーク、あすなろう活動など多様な形体で授業が進められ、平均を上回る評価となった。担当の学生の中にはレポートの未提出がある学生もいたが、他の学生は課題をルールに則って提出することができた。

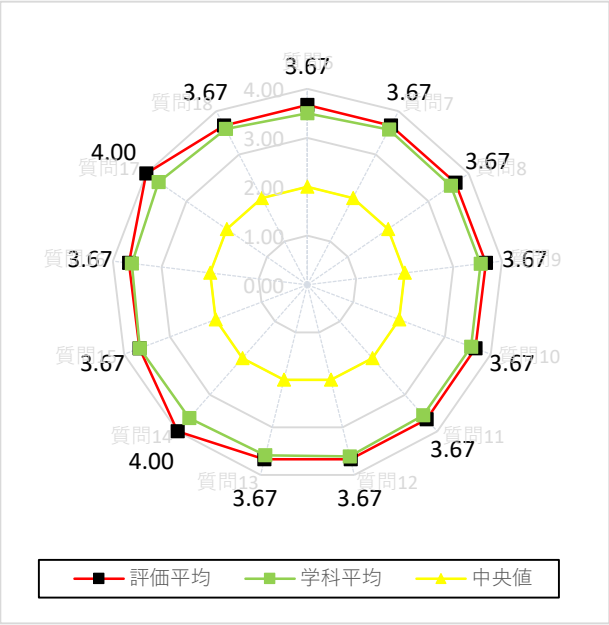
（３）次年度に向けての取り組み

あすなろうという本学の理念が学生に浸透するような働きかけをするように努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう（初年次教育含）	3名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

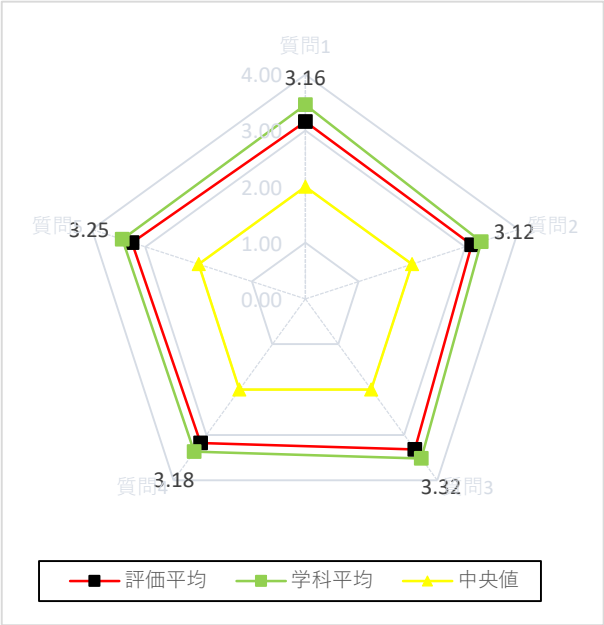
全体の評価点は、3.63点で高評価である。入学後間もない状態から、先輩との交流、学外講師による社会人基礎力に関する講義、看護教員からの専門職の魅力など看護職を目指す基礎的な姿勢が身についていったと考える。またオープンキャンパスやボランティア活動への参加は主体的に学ぶことや行動することの重要性を身をもって理解し、その後の臨地実習に繋がっていったと考える。担当教員は、それぞれの学生の活動や理解の補充に努め、学生の悩みや不安に寄り添ったことより、質問項目14・17の評価に影響したと考える。

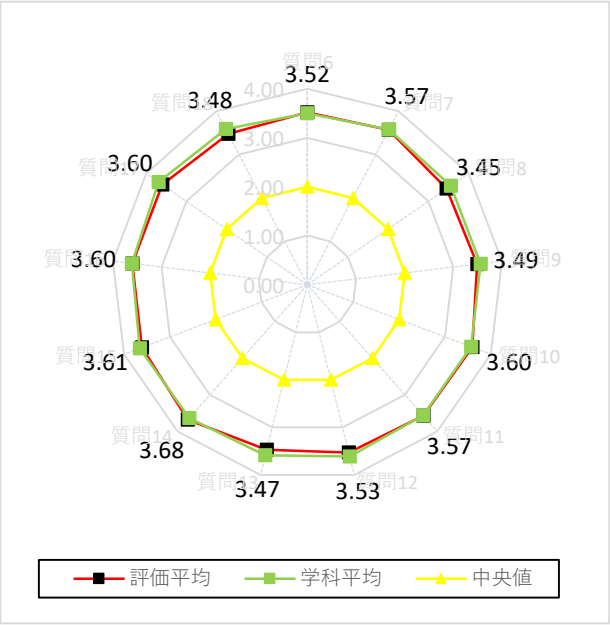
（３）次年度に向けての取り組み

高校から親元を離れて新たに新学してきた学生が大学生活に慣れ、職業観の形成が進むよう関わった。新カリキュラムでは運営や方法が変更するため、これまでの科目の良さを保ちつつ、到達目標に達成するよう学生支援していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		データサイエンス演習	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

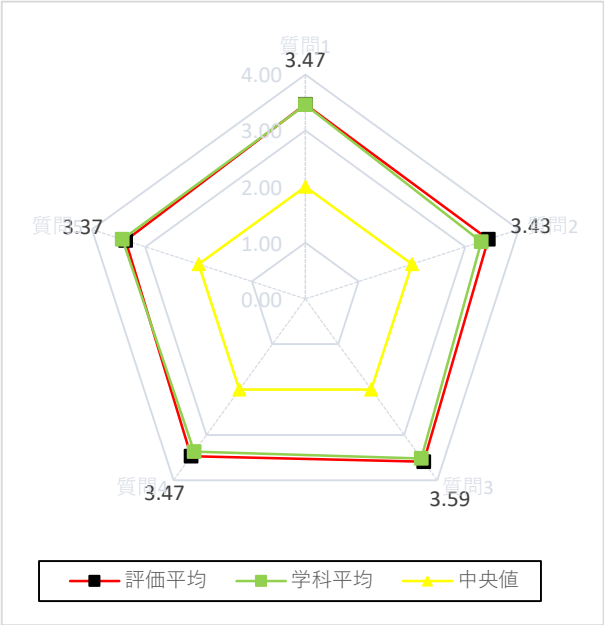
授業の到達目標は、ほとんどの学生が達成できたと考えるが、PC操作、オフィスソフトの習熟に差があり、到達度も大きな違いがあった。
不明な点が確認できるよう教科書をベースにした構成し、レポート作成、看護研究ゼミナールへ繋がるよう課題を作成した。
可能な限り予習の範囲を伝えていたが、取り組んで授業に臨んでいる学生は少なく、課題を明確にする必要があったと考えられる。
中盤以降、PowerPoint、Excelの操作については演習を中心に展開した。概ね教科書の内容の操作はできるようになったと考えられるが、一部学生は苦手意識もあり難しく感じたようである。
授業の進行も早く感じた学生が少なくなかったようであり、改善が必要である。
専門用語はできるだけ平易な言葉で説明するよう努め、授業ごとにリアクションをとって適宜説明したが、難しく感じる学生が一定数いたようである。
自由記載欄にもあったが、アシスタントの教員1名ではPC操作を使った演習はカバーしきれない部分があったと考える。
課題提出が期限内にできない学生がおり、期間延長や追加の説明で対応した。

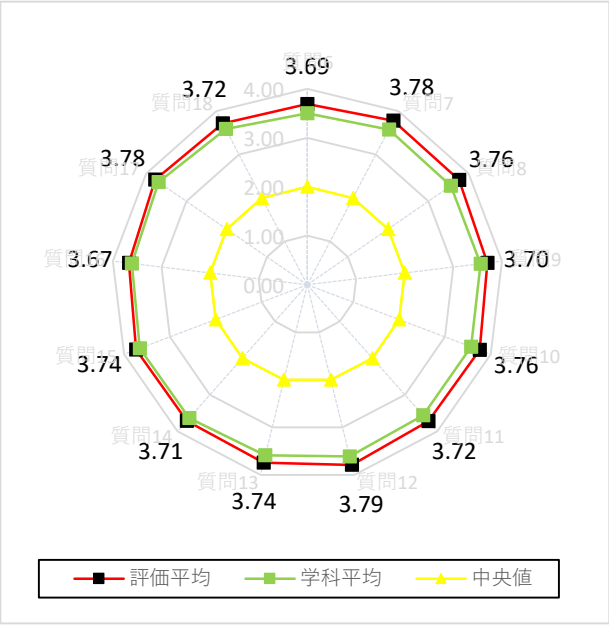
（３）次年度に向けての取り組み

授業の進行方法に関しては、演習科目と言うこともあるため、できるだけ明確で時間内に達成できる課題を提示する必要がある。
しかし、学生のレディネスに差があり、PC操作に苦手意識を持つ学生も少なくない事から、到達度の設定が難しい点でもある。
反転学修や、共働学習の手法を用いて、クラス全体の理解が深まる工夫をする必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護学概論	101名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

学生は、シラバス等を確認し、概ね真面目な態度で受講しており、自己評価についても同様の傾向である。授業内容としては、全て3.5以上の評価があった。また自由記載においても「映像も多く、わかりやすかった」「興味を持って学ぶことができた」「楽しく学ぶことができた」といった高評価のコメントのみであったことから、分かりやすいプレゼンテーション，身近な例を用いた理解の促進などの取り組みが評価され，学生のニーズにもあった授業展開ができたと考える。これらについては今後も継続すべき事項と判断し、１年生の看護学入門科目としての役割は果たしていると考える。

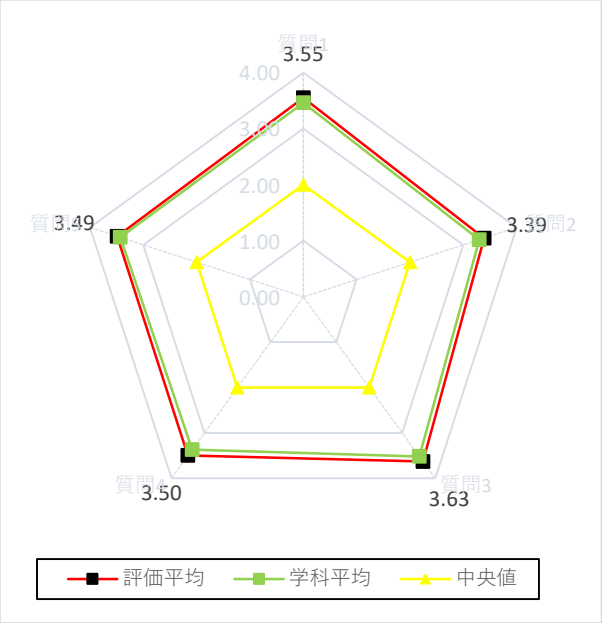
（３）次年度に向けての取り組み

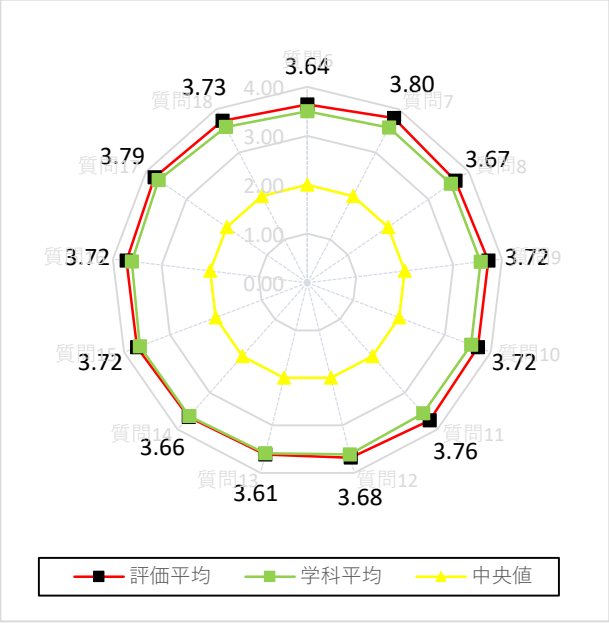
評価の高い項目について低下をきたさぬよう、教材の見直し、学生への働きかけを今年度以上に行い、充実させる。

１．　授業評価で高値項目については，現状を継続する。
　２．講義終了時の質問時間の確保（別途，レスポンスカードでも対応する）。
　３．一斉講義以外の教育方法の検討（学生主体のワーク，ＰＢＬ方式など。しかし概論という科目の特性を考える場合，一斉講義の重要性も否定できない）。
　４．発展学習について講義時に説明する努力をする。
　５．シラバスを継続的に見直すことにより，本科目の到達目標を随時確認する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		療養支援看護学概論	106名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

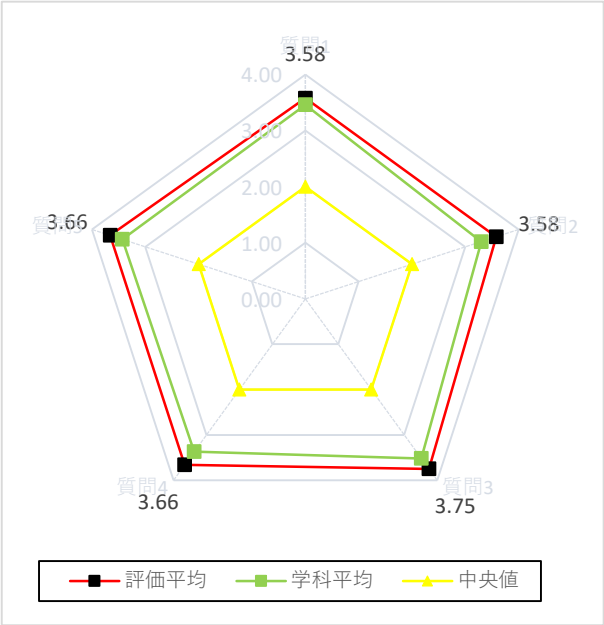
学生自身の授業への取り組み方では、質問３が最も高く、学生は真剣に取り組んでいたと考える。一方で、授業における目標到達の説明や、教員の接心に授業に取り組む姿勢が伝わったこともあり、学生自身の総合自己評価よりも、授業の総合評価として高い得点になったと考える。
教員の授業への取り組み方については、授業展開や、学生の理解への工夫、教科書の活用などの評価から、概ね好評価であると考えるが、学生が主体的に授業に関する学習への取り組み方への工夫があると、より授業内容の理解が深まると考える。
シラバスには、予習・復習の具体的な内容の記載があるが、積極的な活用には至っていないことから、主体的な学習には繋がってなかったと考える。

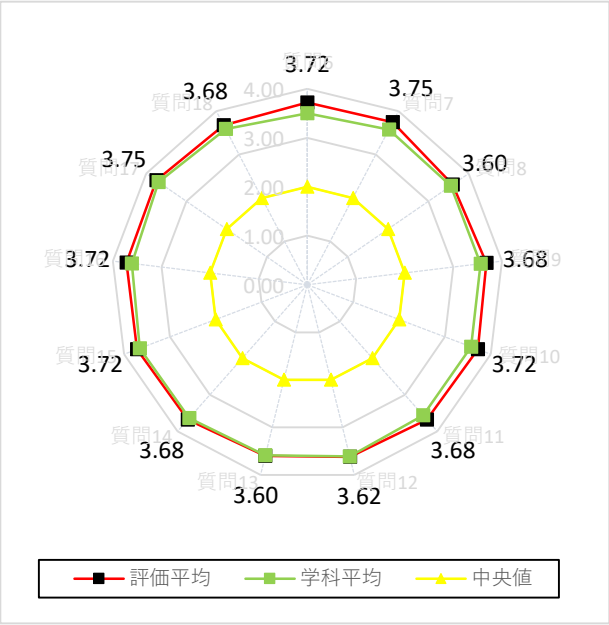
（３）次年度に向けての取り組み

学生が主体的に取り組める課題の工夫を検討する。また各授業コマにおける振り返りの小テストではその場限りになりやすいため、予習・復習内容の提示、または授業につながる課題の提示など具体的な内容と、考える課題にしたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		高齢者看護学概論	106名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

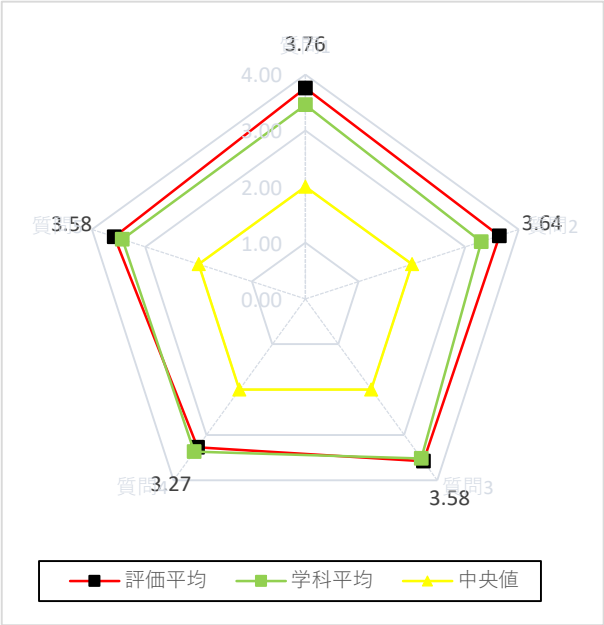
授業の総合評価は3.86と高く、学生自身の評価と合わせても総合評価が3.82と教員の熱意は伝わり、評価は高かった。高齢者との交流・高齢者模擬体験演習は学生の興味関心が高かった。しかし、ちょうど天候が悪く大雨で参加できなかった学生の対応として、1回だけの演習だったので、補習等を検討できればよかったが、機会を再度持つことはできなかった。初めの段階に学生と高齢者との会話しての感想等の課題を設けた課題レポートで補った形としていたが、学生の満足感は低かったようだ。次年度は午前でなく、午後を検討したい。講義全般の評価は高い評価で、保健の動向や制度等の関心度の低い内容も国試対策等も含めて行い、重要性を強化でき、学生も関心を高めていたと思う。

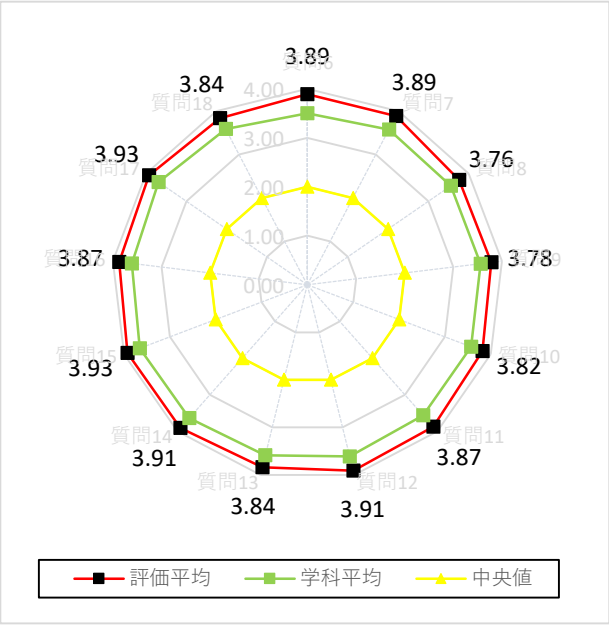
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、高齢者の理解が中心であるので、地域の高齢者に来ていただき、高齢者との交流の演習は天候・交通等の影響が低い午後の時間帯で予定し組み入れ、準備したい。また、テキスト選定を昨年より変えたため、重複内容を整理し、組み立てたい。さらに高齢者理解のために、興味関心が向き理解が高められるよう、講義の中で映像等の活用を強化し、工夫したい。学生同士の認識や考えなど、個人やグループでの意見交換を取り入れることで、自分以外の学生のとらえ方を知り、高齢者との向き合い方にも参考になるよう意見交換の場をできるだけ、持つようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護理論学	80名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

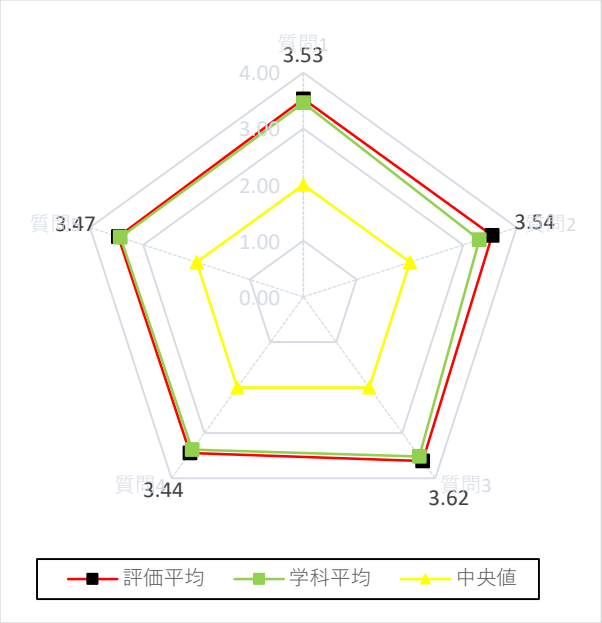
看護理論学と難しいと思われがちな内容をグループワークを取り入れたため、身近に感じてくれたかと思う。授業の総合評価は3.84と高く、具rt－ぷわーく学生が主体的な学修を行ったため、満足感も得られていた。教員の対応にもいい評価を得られた。4月5月の短期間の日程での進行ではあったが、進行の早さも問題なく、じっくり取り組んでいた。学生自身が自分の実習等の振り返りも活用しながら、理解を深めるよう努めた学修になったと思う。

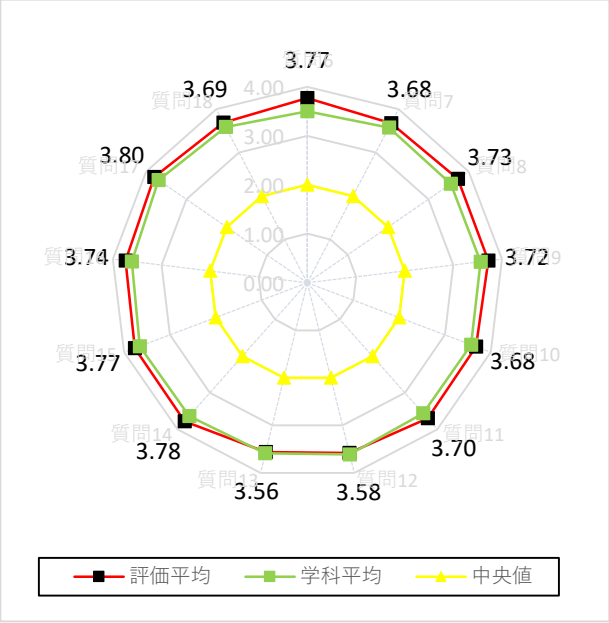
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は学生が主体的に活動できるような学修形態で進められるよう、今後も発表時は学生が司会・タイマー等の役割を設け、責任ある行動でグループワークと発表をつながるよう組み立てたい。看護理論に難しさをできるだけ看護実践につながるような講義内容にしたい。歴史を感じるような書物、現在の現場で用いている書物や文献の紹介を行いつつ、講義とグループワークを効果的に用い、看護理論が看護実践につながる重要な学問であることの理解へつなげたい。最後には学修確認のレポートと小テストも設けたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		次世代育成看護学概論Ⅰ（母性）	105名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

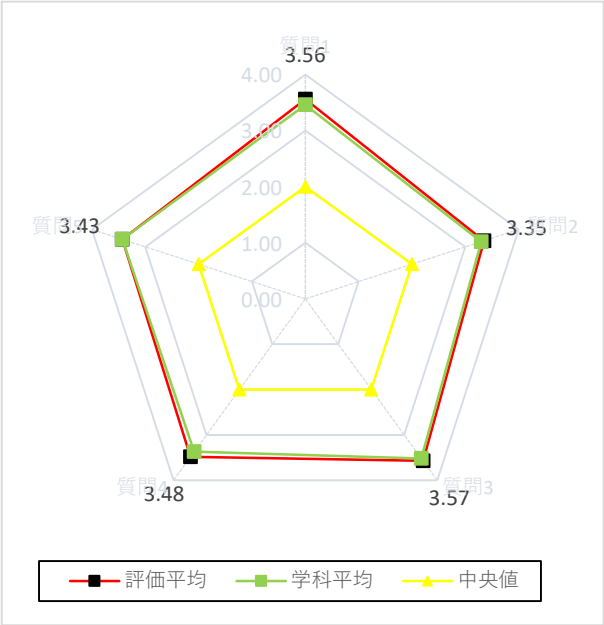
15回の講義を教員2名がそれぞれ9回と6回担当した。概ね学科平均と相違のない評価であった。本科目は母性看護の基盤となる科目であり、思春期から老年期までの女性の生涯にわたる健康支援について学ぶ。また後半は時間数の関係上、周産期の基礎部分を教授している。そのため難易度が高く、授業内容のボリュームも大きかったと考える。そのため、質問12、13の得点が学科平均より低い結果になったと分析する。
自由記載でも「内容が膨大すぎて難しかった」という記載があり、次年度の課題である。
周産期の基礎部分の講義は学生にとってより難易度が高いことを鑑み、毎回講義の前には前回の講義のミニテストを実施し理解度の確認を行うとともに、理解が低い部分は再度説明を加えることで補うなどの工夫を行った。
本科目の内容は学生にとって自分自身や身近な人物への投影が可能な科目であり、学生自身がセルフケア能力を身につける機会になることが授業のねらいの一つであった。授業後のミニッツペーパーでは自分や友人、母親などの健康と照らし合わせながら理解を深めている記載が多くあったことは評価できる。

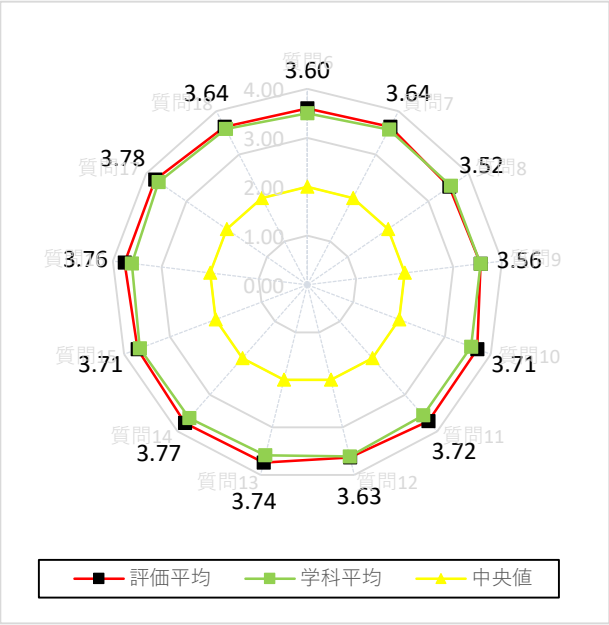
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も今年度同様、教員2名で担当する予定である。
次年度は更に講義内容を厳選し、教授のボリューム、授業展開のスピードに留意しながら進めていく。
専門性の高くなる周産期の内容に関しては、次年度も理解度をミニテストなどでその都度確認しながら進めていくとともに、授業をより理解するために、予習プリント学習を取り入れるなどの工夫を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		地域在宅看護学概論	106名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

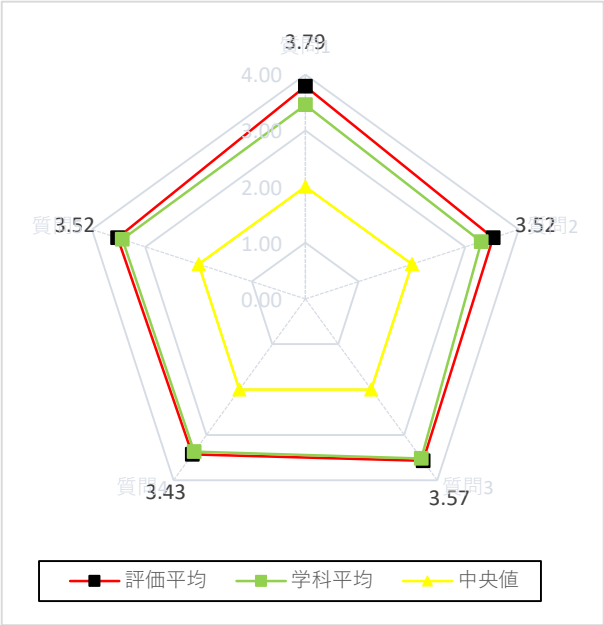
毎回の授業には、ICTを活用したミニテスト（前回授業に関連した問題）、ミニッツレポートを実施した。また授業後半には本時の内容に関連した確認テストを実施するなどの工夫をし、学生が興味関心を持つような工夫を行った。科目全体を通しては、講義、個人ワーク、グループディスカッション、グループワークなどを取り入れアクティブラーニングを行った。そのような工夫が奏功したと思われる。学科平均と同等の評価が得られたのは良かったと思う。

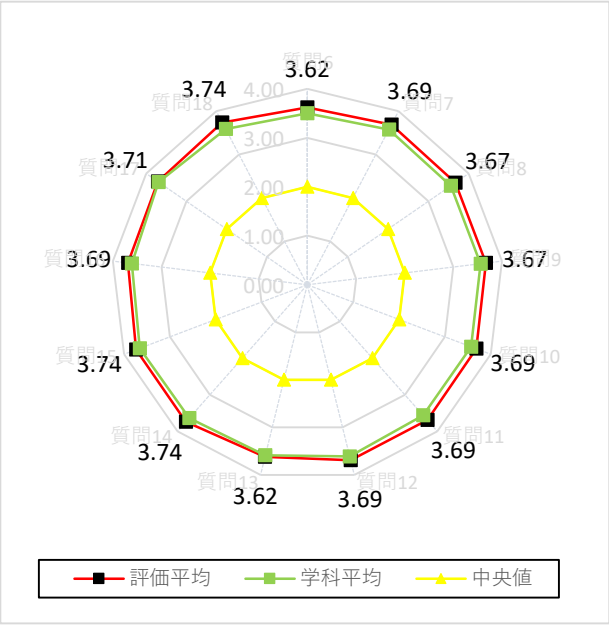
（３）次年度に向けての取り組み

本年度と同様にICTを用いたり、アクティブらーにんごを実施したりしながら学生の興味関心を引き出しつつ講義を実施したいと考えている。また、筆記テストで低得点だった内容を明らかにし、重点を置いて授業展開をしたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学方法論Ⅱ	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

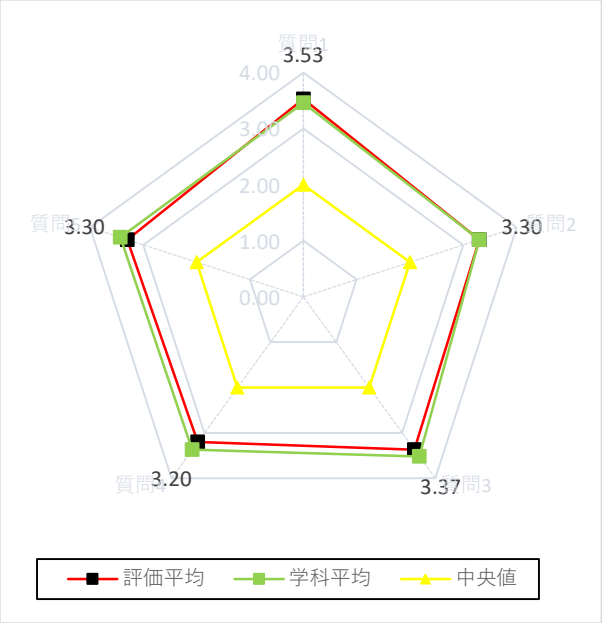
テキストを中心とした座学講義と演習を組み合わせて授業展開を進めてきた。病態や疾患の基礎知識の理解が不十分な学生が多く、2年生で履修してきた病態治療学や看護形態機能学の知識が結び付かず、授業の理解が困難な面もうかがえた。基本的にこの講義は、3年生の後期から開始される実習につながる講義という授業体系を目指しているるが、前述したように病態・治療・形態という基本的な基礎知識が不十分な学生が多い傾向があり、授業理解に結びついていない印象があった。

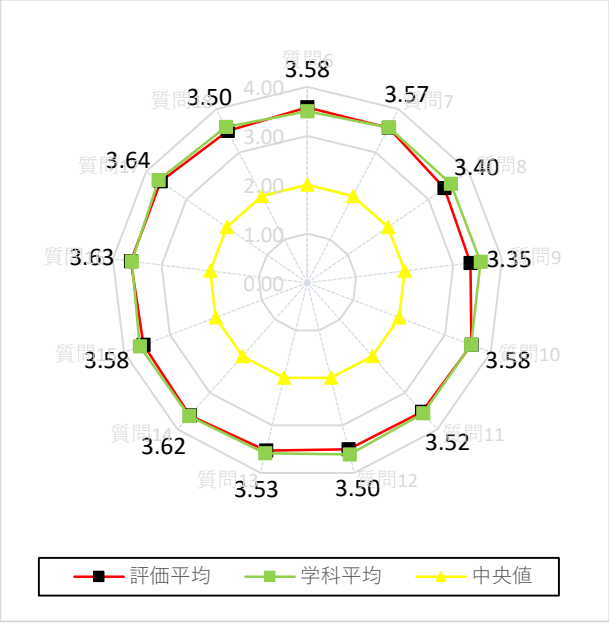
（３）次年度に向けての取り組み

病態・治療・形態についての授業内容をもう少し取り入れて、授業体系を再構築していく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		家族看護学	104名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

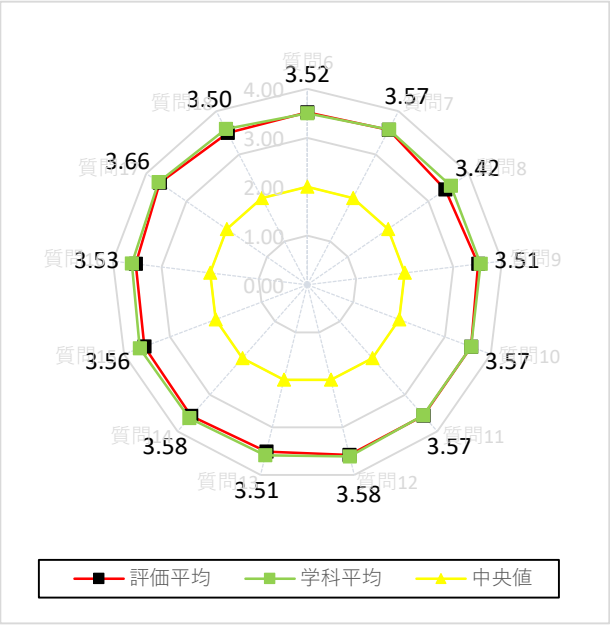
総合評価は、3.50となっており、学生の満足度は高いと考える。しかし、質問2～5は、3.4点未満となっており、学生の主体性を高める工夫が必要と考える。また、質問8、9で3.4点以下となっている。本科目では家族を理解するための理論や重要な概念を説明しているが、家族心理学や家族社会学の影響を大きく受けており、初学者が理解し活用するのにはやや困難であることが予想される。予習課題や教育媒体など学生の理解を促す工夫が必要と思われる。追加の質問項目では、家族看護や家族への興味関心や家族看護過程の展開に関する臨床への活用可能性、教材として用いたDVDの活用について問うた（質問21は質問20の反転項目）。家族看護や家族への興味関心が高まったこと、学修内容の臨床への活用可能性については高評価が得られ、科目の学修到達目標は大凡到達したと評価できる。

（３）次年度に向けての取り組み

学生の主体性を高める方法として、教師の発問の工夫や学生自身が自主的に取り組むワークを取り入れるなど、改善を図る。初学者に難解な概念や理論を紹介する際は、予習項目に調べるなど学生自身が自主的に理解するための学修方法を取り入れたり、テキストのみでなく映像教材やスライドの図表など学生がイメージ化しやすい工夫をおこなう。近年、2学年でも年度により学力やレディネスに差が生じている傾向が見られるため1学年時の学修状況などの情報を積極的に得て、教授法を選択する必要があると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護倫理学	105名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

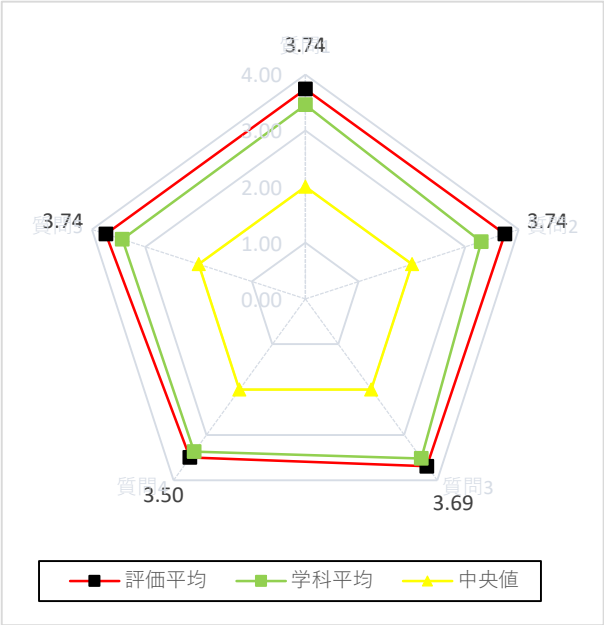
新カリキュラムになって、2年次に学修する看護倫理学であるが、4年生の授業評価より、若干低い 3.5という結果となった。臨地実習に行く前の段階であるので、多少難しく感じられたと思う。88名の回答が得られ、グループワークがあり、他の学生の意見など聞けて良かったとの感想もあり、思考・表出することが大切だと思う。また、今回、様々な領域の倫理場面等があったので、各領域の教員が入っての講義であったため、様々特殊な場面や特徴がみられ、興味深さが出て関心が高まったようだ。媒体の字の大きさ、多さ等についての意見があったが、様々であったので、次年度注意したい。倫理的場面のイメージがつきにくく、衝撃は弱いが、紙媒体での説明でも、じっくり考える時間やワークや機会があれば、1年間の学修や1週間の1年次の実習で倫理に関する内容を受けとめる素地が養われてきていると思われた。さらにそれらを発展する内容にできるよう工夫していきたい。

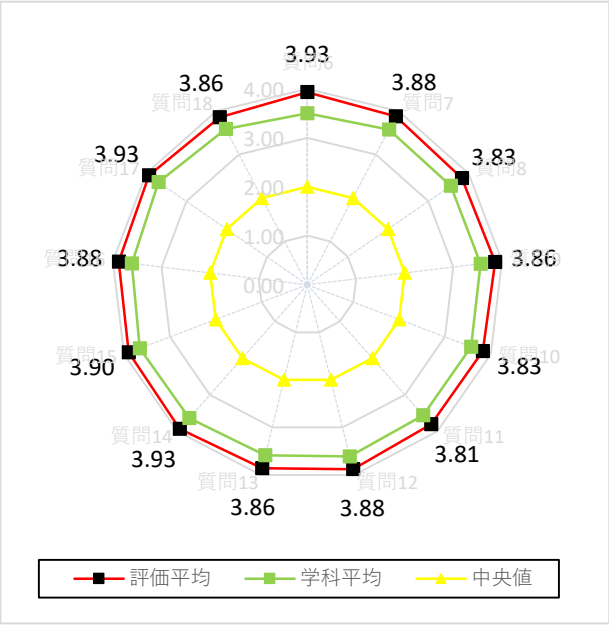
（３）次年度に向けての取り組み

新カリキュラム2年目に向けては、臨地実習の経験の前であるので、より看護実践場面が想像できるよう、具体的な状況を説明し思考できるようにDVDの活用など工夫したい。看護専門職になっていく過程であるので、様々な看護場面の紹介・説明を通して、予測性や危険性なども視野に入れて考えられるようにしたい。また、様々な状況で対応できるよう、基本的なとらえ方・考え方が身につくように、講義および事例を用いデイスカッションを行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護倫理学	80名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

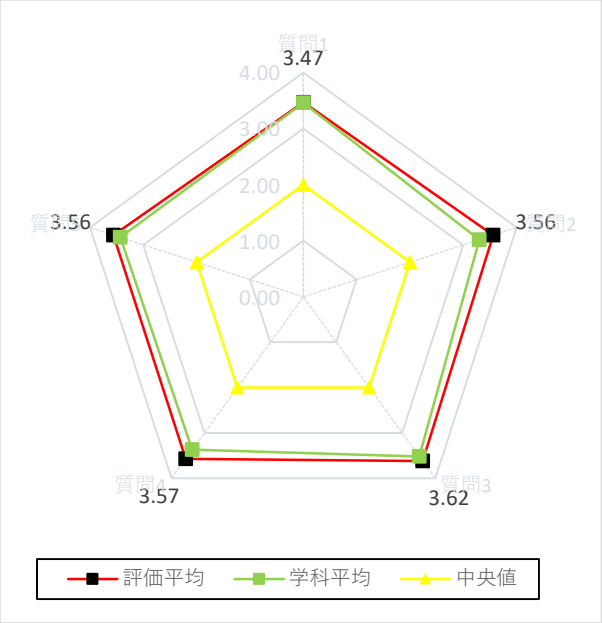
基本的な講義の進め方として、テキスト中心と、学生がこれまで実習を含めて体験してきた内容を踏まえて、各自の意見をもとにグループごとにディスカッションを行うディベート式の講義手法を取り入れた。近年のZ世代の若者は、インターネットの普及やICTが中心であり、 読書をしない、字を読まない、字を書かないという学生が多い。また、大学の講義についてもテキストを指定しながらも、テキスト通りに授業を進めない、テキストを逸脱した講義を進める教員も散見される。そのため、この講義では、近年の教育講義に忘れられかけている、「声を出してテキストを読む」「大切な個所にマーカーを引く」といったごく基本的なテキスト精読中心の講義方法を目指している。学生は、1年～3年の実習という体験で得た知識（実習経験知）を想起し、また声を出してテキストを読み、その座学の知識を統合することで、看護にかかる倫理的な問題を考える、他人の意見を聞き一緒に考えるといった協働学習ができたのではないかと考える。この点は、学生の授業アンケートの自由記述内容からも見て取ることができる。

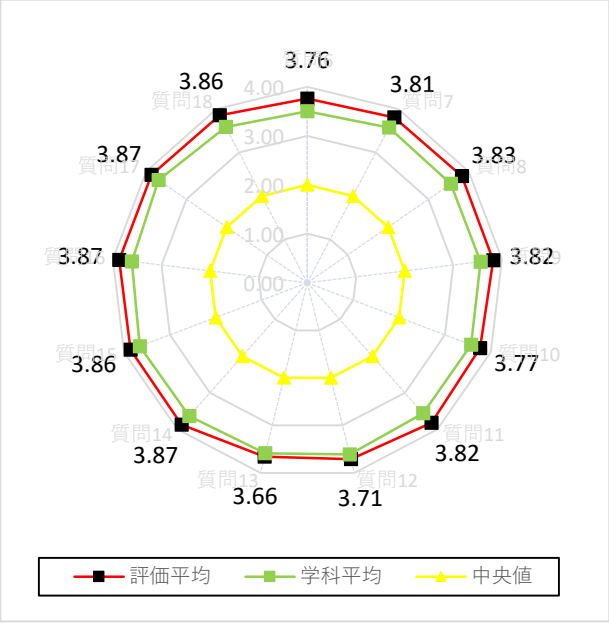
（３）次年度に向けての取り組み

ディベートの事例をグループごとに設定して、違う事例をグループごとで検討させていたため、全体発表会では、他のグループの検討内容を聞いても、しっくりこない学生が多かった。そのため、全体討議のケースは1事例にし、全体が共有しやすいような授業の組み立てが必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学方法論	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

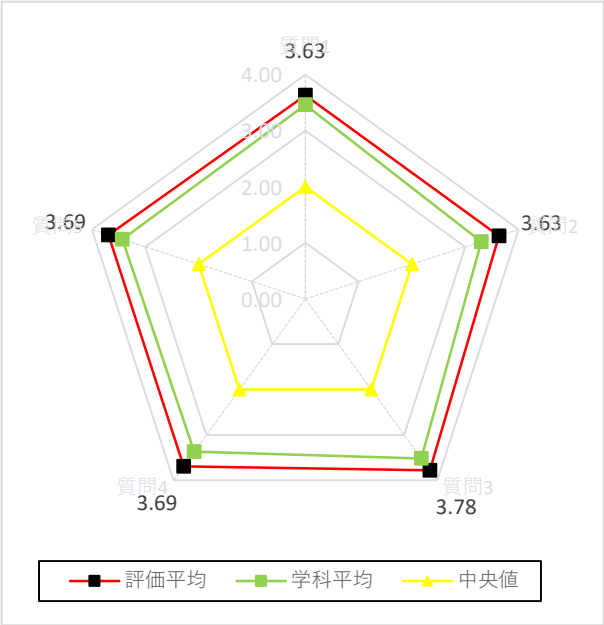
全ての項目が学科平均より高い評価を得た。専門科目では医学的専門用語も多くなることから、講義では「学生がわかるように説明する」「学生がわかるまで説明する」「臨床での体験を織り込み、学生の想像力を高め学びを促進する」「主たる教材である教科書を見て考える学習習慣を身につける授業展開を行う」ことを心がけた。また講義の最中は常に学生の反応を言葉で確認しながら進めた。自由記載では「とても熱心に教えてくれてわかりやすかった」「今まではただ覚えるだけだったが、根拠も併せて教えてもらったので頭に入りやすかった」「授業でこんなに教科書を使う科目は母性だけだったが、とても分かりやすかったし理解しやすかった」「一人一人に話しかけるように授業をして下さり、とてもわかりやすかった」などの記載があり、これらを裏付ける結果を得ることができたことは評価できる。
課題は、伝えるべき内容が多く授業を進めるスピードが速くなったことである。「少しペースが速かった」との記載があった。教授内容は厳選したつもりであったが、学生の理解を考慮すると何らかの工夫、対策が必要である。

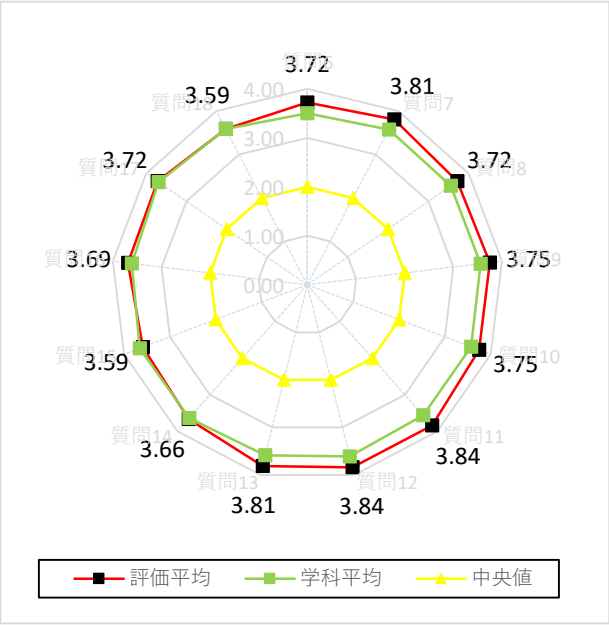
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は科目責任者を交代するが、授業時間数の半分は担当する予定である。教員2名で担当するため、事前に打ち合わせを十分に行い、講義内容のつながり、連続性を大切に授業を進めていく。
教育方法としては今年度実践した方法を継続して実践しながら、課題である「スピード」については話すスピード、授業展開のスピードに留意しながら進めていく。また、予習が講義をより理解しやすくするため、初講のコースガイダンスでは「予習」の必要性について説明したが、なかなか実践に移せない学生も存在したが、中には「予習をしていたので理解できた。予習の大切さがわかった」という記載もあった。次年度は口頭での促しだけでなく、予習プリントを作成し事前課題として提示するなどの工夫を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		在宅看護学実習	80名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

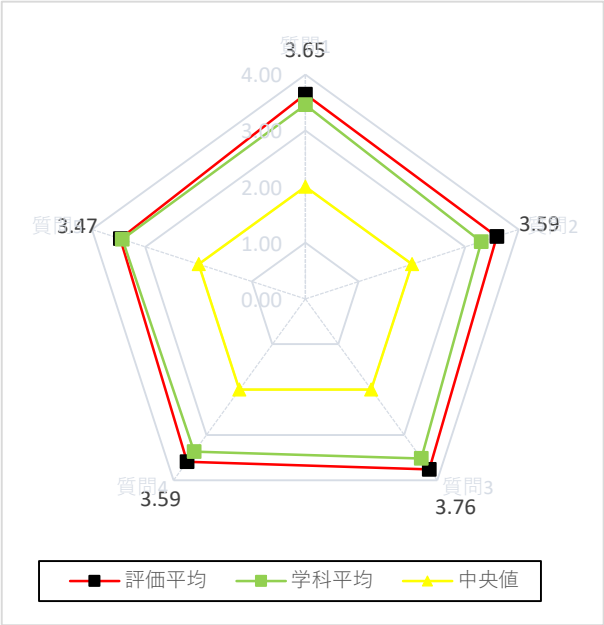
概ね学科平均と同等の評価が得られた。実習なので、臨地実習指導者の多大なご尽力のおかげと思われる。

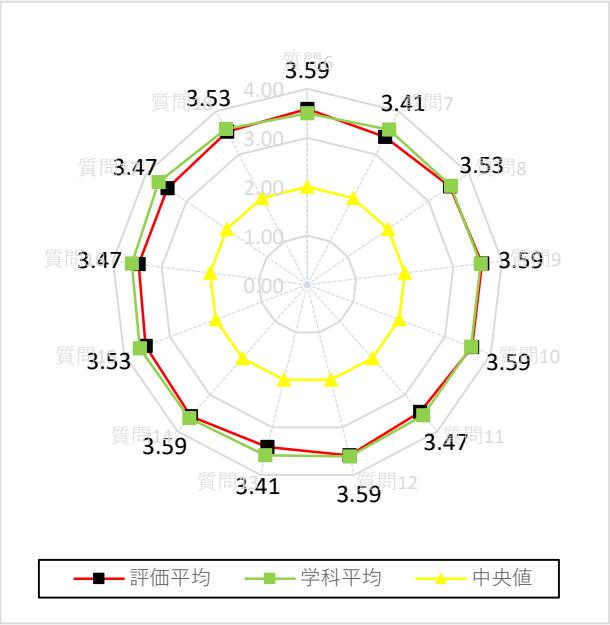
（３）次年度に向けての取り組み

臨地実習指導者と学生の関係性を早期に構築できるように支援することで、さらに満足度の高い実習になると考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		関連職種連携演習	30名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

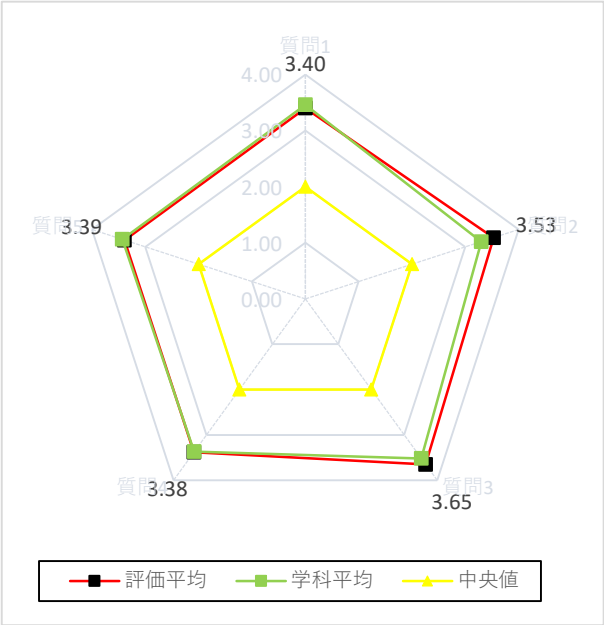
　看護学部の学生及びその他の学部・学科の学生が受講している。
授業内容に関して小児～高齢者までの多様な障がい、疾患を抱える人、その家族に対する支援についてケースを通してグループワークを中心として学修していくというスタイルである。そこに担当する専門的見識を有する教員が支援をしながら、学生が主体的に課題を解決していくというものである。授業の方法が受講学生が籍をおく学部キャンパスが異なっていることもあり、オンデマンドの形態で実施した。
　受講学生はあらかじめ提示された複数のケースからグループごとに選択し、問題解決型体験学習により、グループワークを進めていくことができていた。その解決していく中で担当する教員から助言をもらったり、教員へ質問をしていったりしながら主体的な学びをすることができていた。その充実度合が学生による授業評価としてあらわされていると考える。

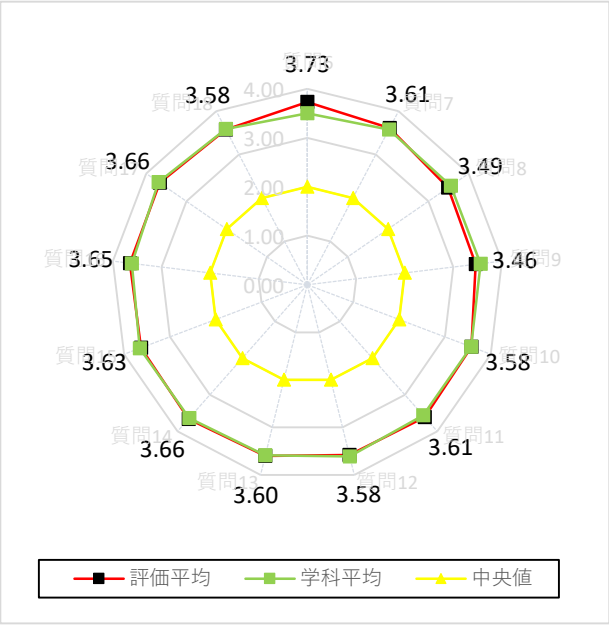
（３）次年度に向けての取り組み

　次年度においては授業名称が「関連職種連携論」に変更され、土日を中心とした集中講義形式から、若干の変更が加えられることとなっている。
参加学生は本年度同様に３つのキャンパスにわたるためにオンデマンドによる授業と看護学部の学生は教室での授業となり、ハイブリット的な形態となる。
授業の内容、授業構成は問題解決型体験学習を踏襲していく。その中でのグループワーク及び個人ワークの両者を組合わせながら、より、主体的、能動的な学びの中で、深い専門性と広い専門性を得ること及び、他学部の学生との少人数グループを構成し、グループ全員で共通性の認識を共有しながら共同で課題解決をしていきながら、深い関係性と広い関係性のあり様を体験していくことができると考えられる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究方法論	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

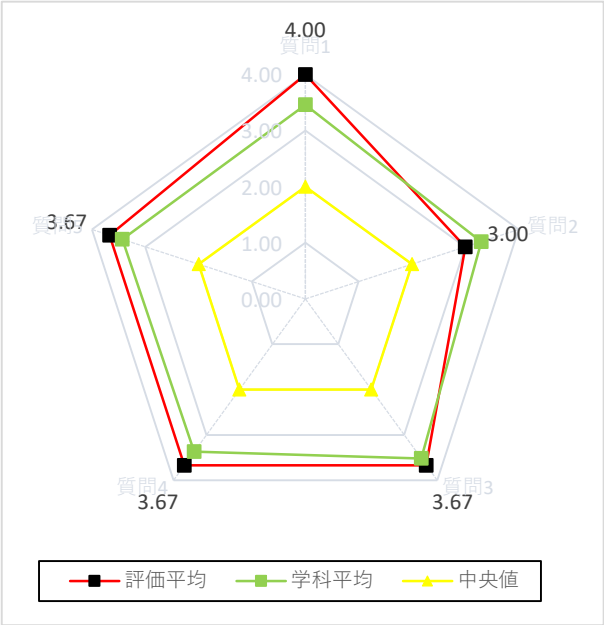
授業の欠席をせず、真剣に取り組んだようではあるが、学生は主体的に工夫をしながら、授業理解への取り組みがやや低い傾向にあった。授業に対する興味・関心、わかりやすさについての評価が低いことから、教科書の内容だけでは、理解が難しいことが考えられた。
今年度は、４年次の卒業研究に向けて、テキストを中心に、看護研究の基礎的な知識と文献レビューを中心に目標達成を目指した。しかし、看護研究としての興味・関心を促すためには、テキスト以外での実際の研究内容の紹介などを含めることで、関心につながると考えられる。

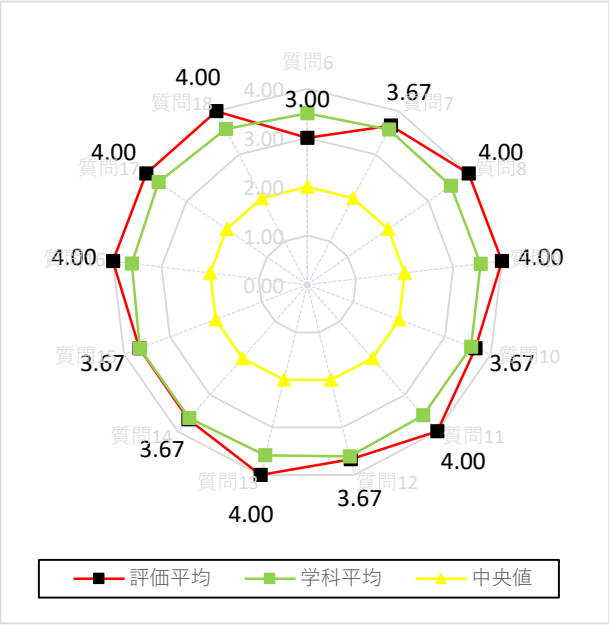
（３）次年度に向けての取り組み

研究は、専門職として自己研鑽を続けていくうえで必要な知識であるが、その中でも興味・関心がある内容を研究内容に取り入れることが必要になってくる。そのため、研究の楽しさを知り、さまざまな研究の成果などから、学生自らのリサーチクエスチョンになるような、授業内容の工夫をとして取り入れていきたいと考える。授業において、各教員の研究の紹介から、リサーチクエスチョン、研究成果の活用、などを講義の場で紹介する機会を検討する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

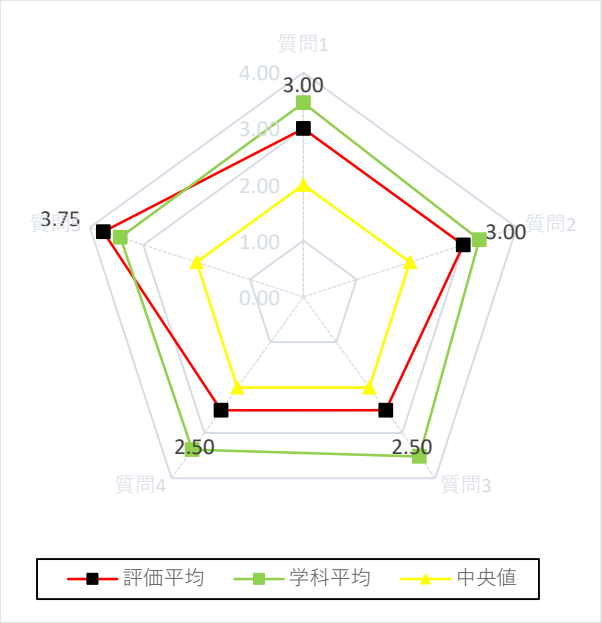
回答率が75%
計画通りに進まなかった者の評価がなく残念だった。おそらく、本人の達成感も低かったと思われる。回答した学生は計画に沿って、期日等も守り、研究に臨んでいた。ゼミ生同士の意見交換が後半はほとんど持てず全くの個人ワークになってしまった点を反省する。

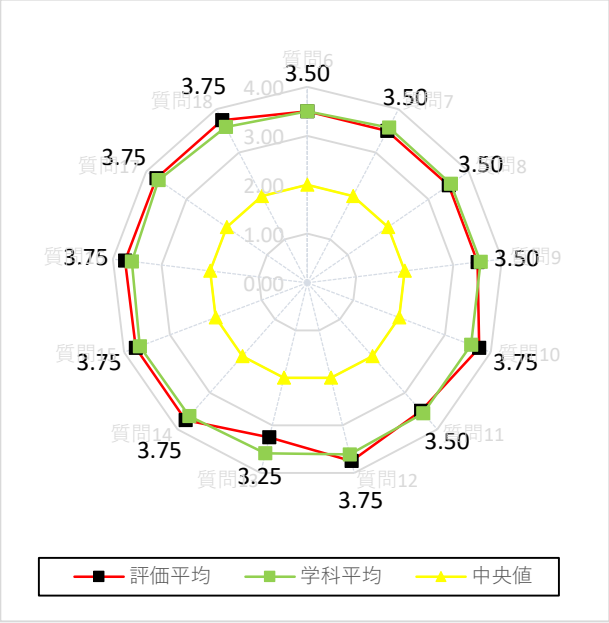
（３）次年度に向けての取り組み

学生の主体性、ゼミ生同士の討論を期待したい。
学生からの意見で、発表会をしないでというのがあった。おそらく時期の検討が必要かと思われる。国家試験の結果に不安を抱えるものにとっては、国試終了後の実施はきつく、身が入らなかったと予想される。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

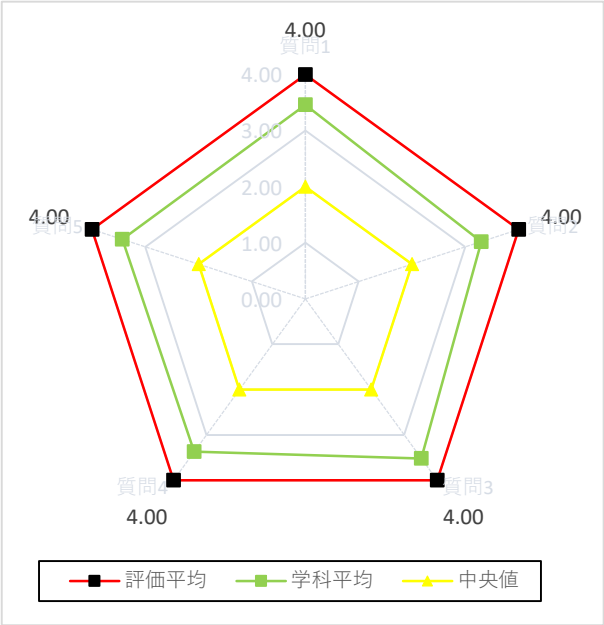
授業評価点は3.43点であった。質問項目6～18に関しては、3.5以上となっており教員の姿勢・指導内容への評価は高いが、質問1～4では、自己評価に1をつけている学生もおり、学生の自己評価が低い学生がいたことが分かる。4年次は学生個々で実習期間や就職活動の時期が異なり、グループ学習が困難となるため、学生と教員とのマンツーマンでの指導となることが多い。教員からの連絡への反応が途絶え、元々学生同士の交流が少ない場合は特に研究進度が遅れることがあるため、研究が進んでいなくても他の学生の研究指導に合流させるなど定期的に合う機会を作るなど工夫が必要である。最終的には研究の提出期限には間に合い、研究発表会での発表や質疑にも的確に応答し、総合自己評価では、全員3点以上が付けられた。

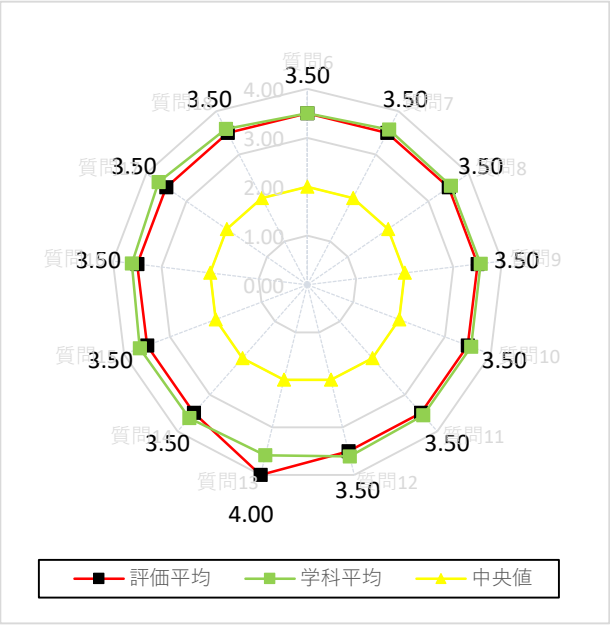
（３）次年度に向けての取り組み

個々の学生で実習期間や就職活動期間がずれていくが、可能な限り2名以上の学生を一緒に指導することで学生が取り残された感覚にならない様、配慮する。早めに取り組み集中して実施したい学生もいるので、学生の希望に応えられるようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

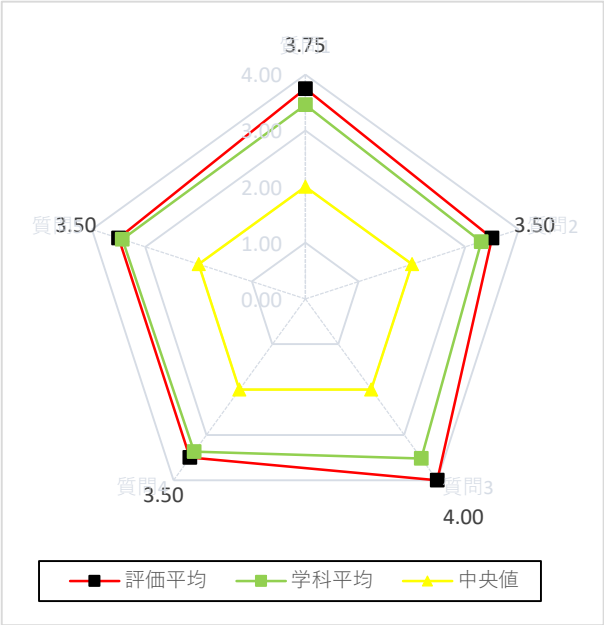
4名の学生を担当したが、ほとんどの評価が学科平均より若干低い評価となった。着任して領域担当が一人しかおらず、多重業務をこなしながらの卒研指導は時間の確保に苦労し丁寧に指導できなかったということもあるが、私自身の研究指導能力も影響していると分析している。
後半は教員が1名着任し、卒研指導をかなりサポートしていただいたことで最後までたどり着くことができた。領域教員のサポートに感謝している。

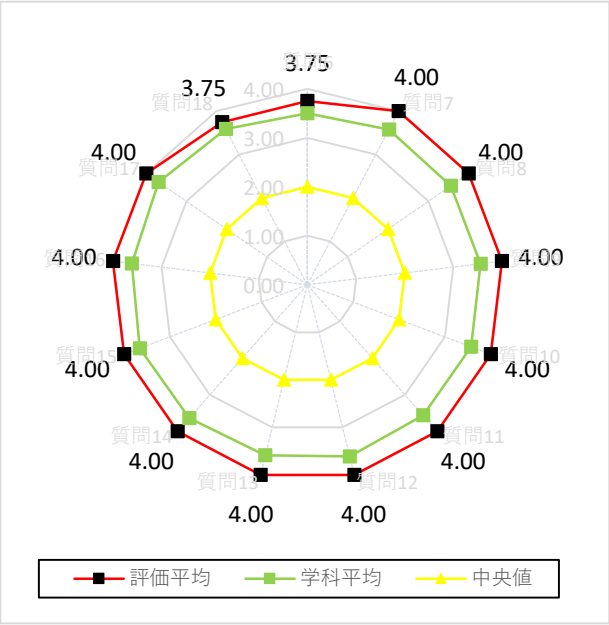
（３）次年度に向けての取り組み

学生の状況に応じてグループ指導と個人指導を効果的に活用する。早期より計画性をもって指導に取り組む。
学生とのコミュニケーションを十分にとりながら進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

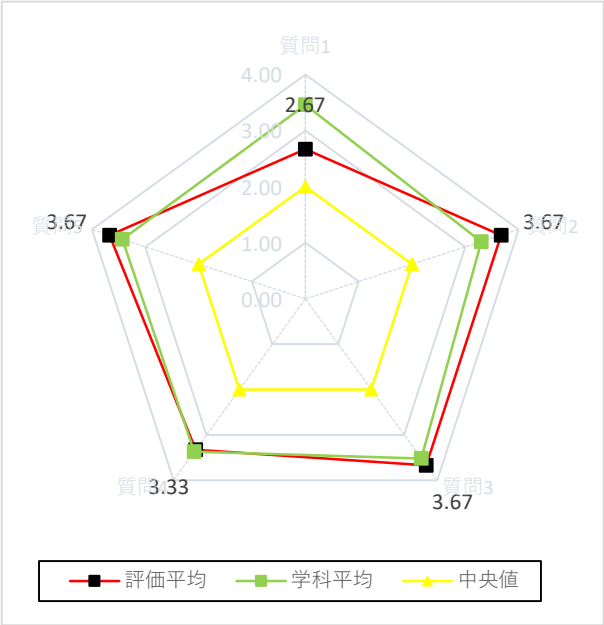
全項目において学科平均を上回っていることから、学生は積極的に取り組んでいたと評価する。一方で、質問4「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」が全体の中では低い傾向にあった。卒業後も看護研究を継続して実施できるように、興味・関心を促す工夫が必要であると考えられる。

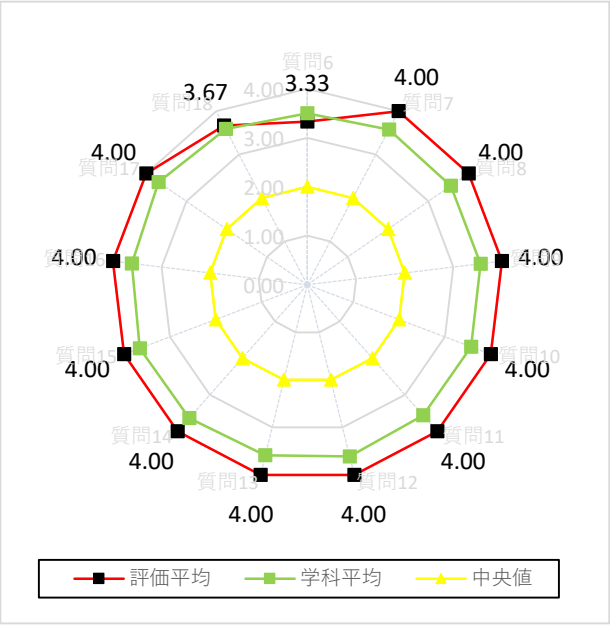
（３）次年度に向けての取り組み

研究は、卒業後も専門職として自己研鑽を続けていくうえで必要な能力である。そのため、研究の楽しさを知り、さまざまな研究の成果などから学生自らが主体的に取り組めるよう、授業内容の工夫をとして取り入れていきたいと考える。授業において、教員自身の研究をする機会を検討する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	3名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

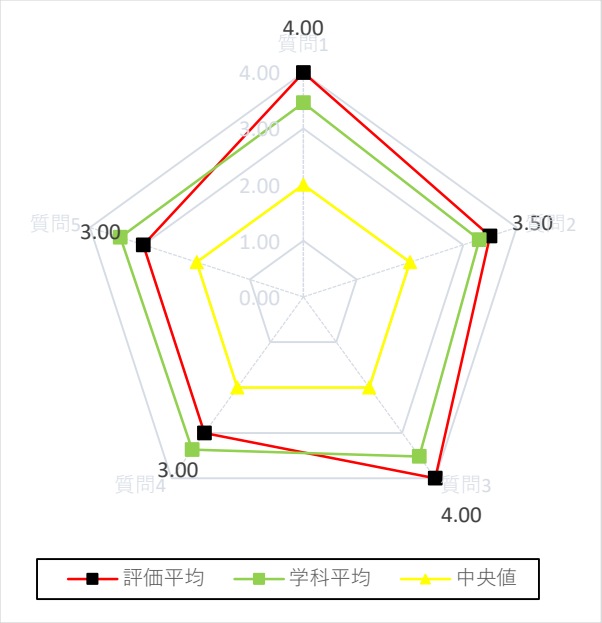
質問6のシラバスについて説明があったという項目については、科目責任者より説明されており、ゼミの担当教員である私も授業計画を立てて書面と口頭で説明したので、なぜこの結果にな他のかは不明である。そのほかはほとんど平均を上回っており、学生の満足度は高かったと評価できる。学生のゼミでの発言は回を重ねるごとに自主的、建設的なものとなり、お互いを刺激しながら自立して研究を進めることができた。体調不良等で数回欠席する者があった。

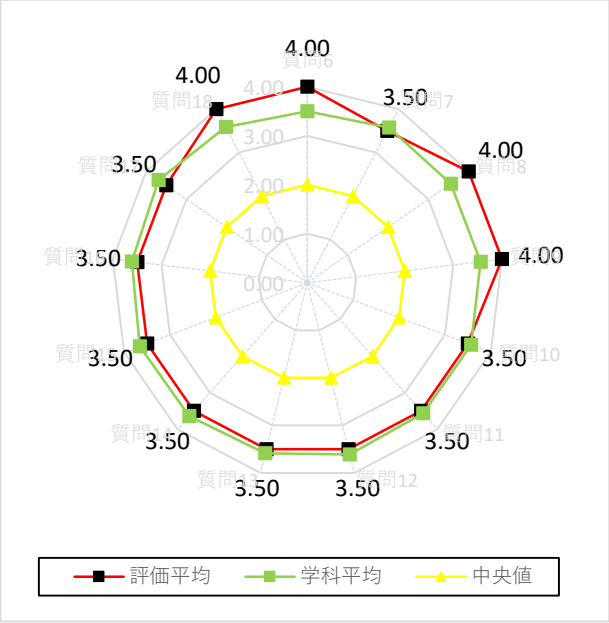
（３）次年度に向けての取り組み

ゼミでは学生同士がお互いに切磋琢磨できるような環境づくり、雰囲気作りをしていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	2名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

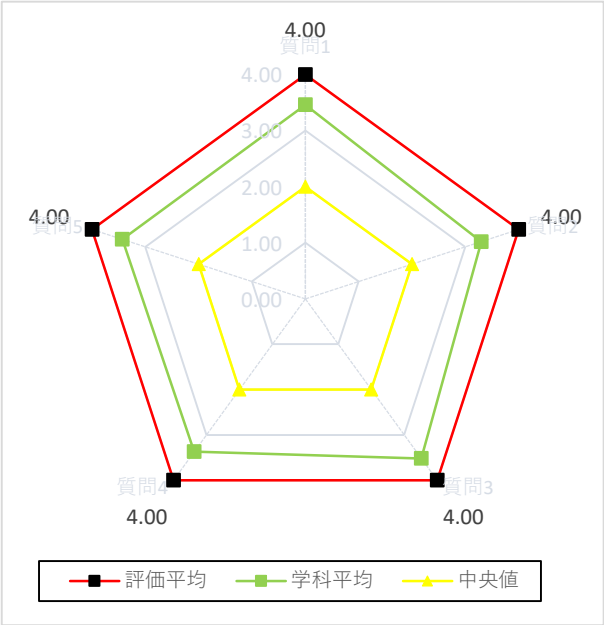
担当学生2名において、看護研究ゼミナールについては、概ね目標に沿った学修ができたと考える。
授業目標については、初回に説明し、学生らと合意をしていた。論文提出日にも目標について振り返りを行ったが、学科平均よりやや理解度が低かったことから、今後は毎回目標の理解度を確認するなどの理解促進を行いたいと考える。
学生は、ホウレンソウについて、一人の学生は、秋口までなかなか連絡が取れなかったことが、研究結果が出たころから、理解が進み自力で論文作成に向かう姿勢がみられた。一人の学生は、自己肯定感が低く、自分の殻に閉じこもる傾向があったが、研究を通して自分の家族への理解や自分の傾向を理解し、頑張りたいと意欲を出して研究論文作成を熱心に行うことが出来ていた。
両学生とも、始めは研究という言葉に苦手意識を持っていたが、研究の方法やその方法からわかることが理解できると、積極性が生まれ提出時には、目標を達成することが出来たと考えられる。

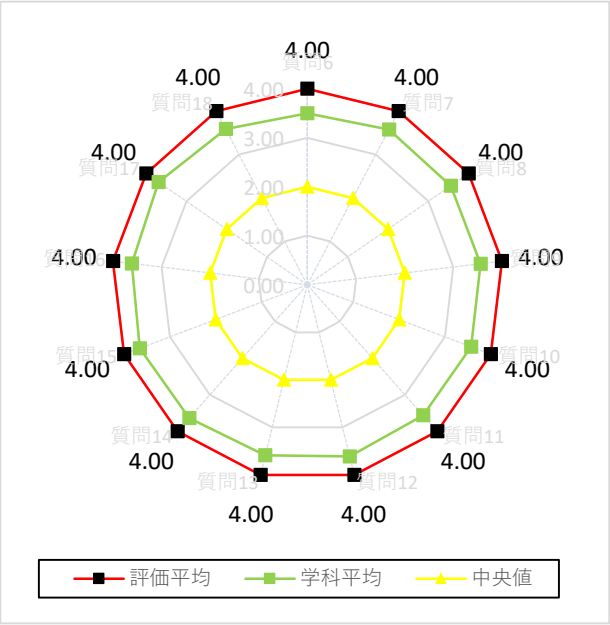
（３）次年度に向けての取り組み

文献研究について、3年次の方法論ではグループによる文献検索までに留まるため、初めて実際に論文作成まですることに不安が大きいと考えられる。
また、4年次春から夏にかけては看護実習や就職活動も並行して行っているため、気持ちが入らず苦手意識が高いと考えられる。
次年度は学生の履修状況を考慮して授業計画を立てたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	2名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

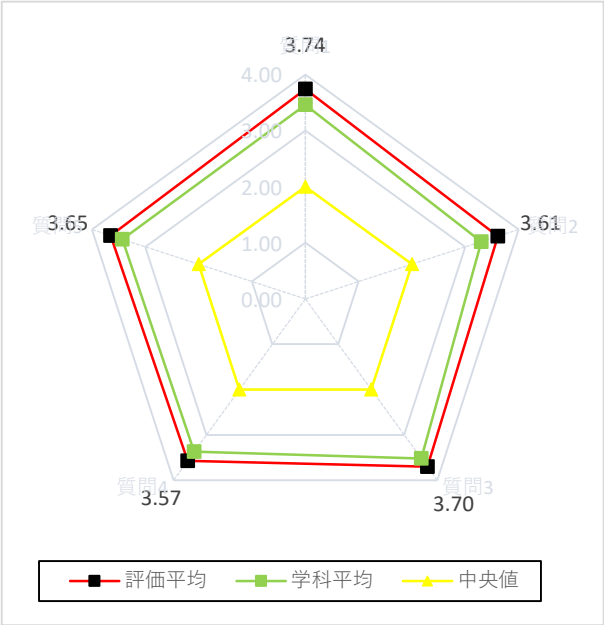
担当学生と日程の調整・確認を行い、学生自身も積極的な取り組みを行った。課題に対する提示物や講読結果をもとにメンバー内での活動と個別の指導を組み合わせ、計画的な進捗状況であった。内容も学生自身の目的に向け、課題学修を深めることができた。

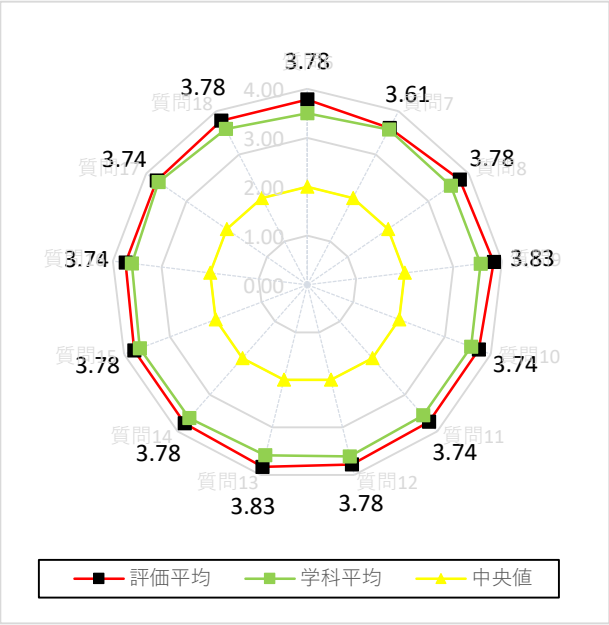
（３）次年度に向けての取り組み

学生主体の活動として、学生自身のテーマ選択の尊重を行いつつ、4年次のスケジュール過密な中でも時間調整は必ず行い指導していきたいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		健康教育学	27名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

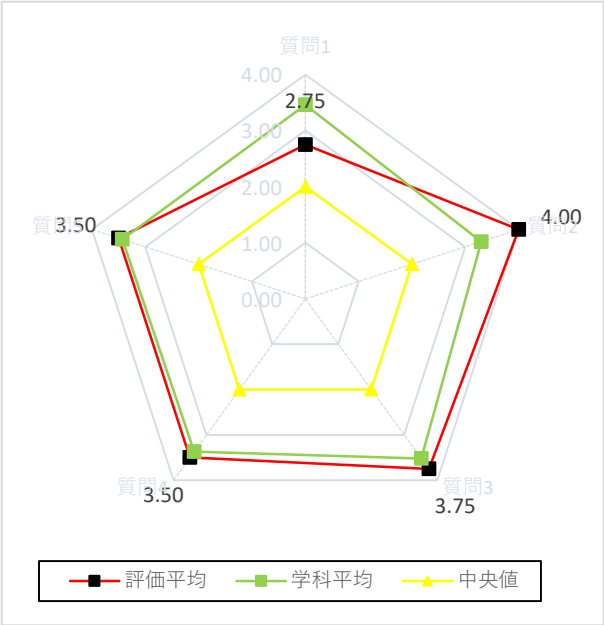
高い回答率で評価も総じて高かった。自由意見が少なかったが、健康教育の実施に向け準備も楽しかったというコメントがあり、良かった。

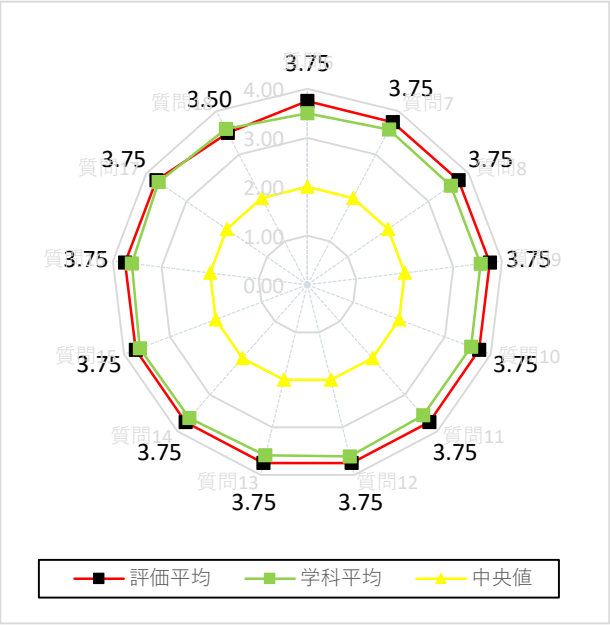
（３）次年度に向けての取り組み

各教員が担当学生を個別に指導し、成果を発表する現方式を今後も踏襲していきたい

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		公衆衛生看護学管理論	30名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

回答率が低い。
授業の中で、時間をとり評価をしてもらうようにする必要がある。声掛けだけでは反応がない。具体例や事例への興味関心が高く、「良かった「」という意見があったので、今後も取り入れたい

（３）次年度に向けての取り組み

評価を促し、学生の意見を聴きたい。教科ごとではなく学生全体もに授業評価を促していただきたい。